

「白金センターの受け持ち配送員なら分かる筈、私から連絡しておこう」

昼下がり一平は休憩所の長椅子に腰かけていた。コーヒーをなっちゃんが運んで来る、センター長と貝塚配送員は揃って昼食に出ていた、留守の間に一平さんが来たら相手してくれて言っていました。明日の打ち合わせもある一刻も早く大使館前の情報を手に入りたい。そんな一平の仕草をなっちゃんは見逃さなかった、

「私では不服」

「いやそのような事はございません」

「では如何様に私ではもの足らないような素振りには」

「二人が重要な手掛かりになる情報を持っている、早く会って確かめたい小生の頭っ中それで一杯だった、よっておろそかな返事してしまつて相すまんです」

「だつたらいいけど、コーヒー入れて損しちゃった、入れなけりゃ良かったと思うほど、時間だなー間もなく二人は戻ると想います」

気を良くした宮城奈々子譲はキーボード打ち込みがありますと言つて衝立の向こうに消えた、数分後大堀センター長と貝塚配送員はお待ちせしましたと休憩所に。

「大分お待ちになりました、来るんなら時間を言つといてくれれば」

「十分ほんです、小生の用事ごとです、それには及びません」

これが大使館入口前の見取り図です、B4紙を一平の前に広げた。貝塚君、説明頼むよとセンター長が言う。

「大通りに面した所に大使館と入居用の入口があります、その間に地下へ続くビル駐車場入り口になっている」

配送員は鉛筆でなぞりながら説明、一平も肯きながら聞き入る。

「左側が大使館用で警備員室、通用口となつていて誰しも手前の警備室で許可を得なければ入館出来ない」

「入り口前の広さはいかほど位」

「ハイデッカーが優に転回できる広さがあり円形をなしロータリーになっている」

「車使用者はどーすればいいんだ」

「大使館員はパスを警備員に提示し前方の地下駐車場に繋がる入口へ、一般の人はロータリーの内に八台の停車スペースがある、そこに一旦停め手続きをし地下駐車場に向かう、指定の場所に止め諸部署に行く」

「ならば新聞や郵便物の場合はどーなっている」

「其々停車スペースに止め警備員に手渡しされる」

「小荷物便は如何様に」

「大使館宛ては警備員が事務方に連絡し取りに来て頂く、個人宛は直接渡し本人のサインを頂くようになっていす」

「本人かどーかは分かるものですか」

「写真入りパスを胸に下げていますし警備員も確認をとります」

「なるほど、では本人が不在の時は如何ですか」

「持ち帰ります、と同じして不在書を警備員に渡します」

「誤配は我々にとって罷りならぬ事、信用問題でもある、ましてや大使館は国際問題に発展もありうる、誤配は我々の命取りと言っても過言ではない」

と大堀センター長が合いの手を入れた。

「相お分かりした、配送業務に掛かる熱意は素晴らしいものがある、小生も見習わんとなー」

と続く言葉に一平は戸惑いを見せていた、無理もない偽配送する一平達に協力してと言いつつ辛くなっていた。なっちゃん
が助け舟の如くコーヒーを運んでくる、そして三人に言った。

「緊張で固まったようですね、私も仲間に入っちゃおう」

マグカップを持ち一平の隣に座った。

「どう一平さん、まりさんの入れたコーヒーとどっち」

一平は閉口のみ。

「一平さん、何か勘違いなさったのでは、我々は配送業務にかけているが本心である、が一平さんに協力は惜しまないよ、ましてや出口が見えかけて来たならなお更です、極秘捜査、偽配送を後押しします、先程宮城事務が言ってたコーヒーどつちは、美味しいコーヒーを入れる奥さんに持つ一平さんが答えに困らせようとしただけ、やっかみもあるうが何一つ意味はありません。なっちゃんそうだろう」

「はっはい」

センター長に腹の中を見られたなっちゃんはほんのり桜色。

「一平さん、他に貝塚配送員に尋ねたい事は」

「この見取り図があれば十分だ」

もしよろしかったら策をお聞かせ下さい、とセンター長コーヒーを飲みながら言った。

「はい、そーしましょう、小生の軽四駆で明日十時にマキと一緒にここに来ます、麻布署員の大さんと松ちゃんも来ます。マキと松ちゃんは宅急便のツナギを私服の上から着る、小生等はステッカーを貼る、小生と大さんは徒歩で大使館前に向かう、着いたならば偽申請書類配送開始の合図を送る。松ちゃんが四駆を操り助手席でマキが座る、大使館の警備室から良く見えるように停車場に停める、マキが警備員に荒木田輝夫様より夏目浩二様宛に査証申請書類ですと告げる。ここからは想定つかん、マキと松ちゃんに掛ける、成功か否かだがどつちにしろ言える事は長居は無用直ぐ退散。不審を抱き追尾も考えられるその確認は小生と大さんが行う、大使館を出たら人目のない路地裏に入りステッカーを外す、更に走り人影まばらな所で車内でツナギを脱ぐ。こーすりゃー見積車ではなく軽四駆に乗ったカップルにしか見えない、万一に備え天現寺ランプより首都高速に入ればいい、後はいっぷくで合流。てなシナ

リオだがいかがかな」

「かつこいー十津川警部とか推理番組の様だ」

なっちゃんが言うのとセンター長がキツと睨み返した。

「遊びじゃーないんだー何てーことを言うんだ、一平さん成功するよ、いい知らせ待っているから」

「一発勝負、へますりゃー麻布署員二名の更迭も在り得る、失敗は許されん、何としてもでも成功させなけりゃー、久々に黒目が動きよる」

「黒目が動くとは如何なる事ですか」

「相やすまん、センター長さんに言っていないかった、山とみると黒目が動き回り大きく見えるんです、それが何時しか皆はサンマの黒目と言ひ、誰とはなしに小生をサンマと呼ばれるようになった」

「そう言えばそのように見えます、サンマさん白金センター皆で応援しています 是非ともいい結果を」

「ありがとうございます、アラ古希なれど小生のCPUは健在です」

翌日十時白金センターで四人は最終確認し散った、マキは助手席で気を静めているのかラクビー選手を真似る様なルーティン。軽四駆は大使館の停車場に停った、マキがA4の茶封筒持ち警備室へ。

「荒木田輝夫様より夏目浩二様宛に査証申請書類です」

警備員は夏目と言いつつ、夏目つて居たつけかなーとか言いながらインターホーンに向かった。

「はい事務方に伝えます、通用口でお待ち下さい」

僅か時間をおいて今降りてきます、警備員はマキに伝えた。

通用口に現れた事務方を見、マキはあつとしたが発しを押し堪えた、冷静を取り戻し事務方に言う。

「夏目様宛の査証申請書類です、受け取りサインをお願いします」

とマキは言った。事務方はその様な人物はいないと言う、マキはたじろんだが然る者、再配達用紙に必要事項を記

入し渡した、その用紙には夏目浩二なる人物が居なかったら一平に言われた通り警視庁監察官室の番号を記入した。

「今は出かけていないが私が受け取って渡してもいい」

「本人でなければ渡せません」

マキはそう言い通用口を離れた、事務方もそそくさと館内に消えた。

宅急便さん、と警備員に呼び止められた、偽配達がばれたかギクツとせざるを得なかった、が次の言葉で安心するも胸の内でVサインした。

「私は大使館開設以来ここにいます、書記官補佐の白家秀忠さん直々で封書受け取りに来られたのは初めてです、何か変です」

とマキに伝えた。

警備員にありがとう、礼を言い四駆の助手席に戻った、

「長居は無用直ぐ出よう」

とマキは松ちゃんに言いながらVサイン、松ちゃんもぼちし撮れたとVサインを返した。

大道りに出た所に一平と大さんが不安気に二人を見ている、Vサインを送った、ようやく顔が綻び親指と人差し指を丸めこくり。

予定どうり路地に入りステッカーを剥がしツナギを脱ぐ、松ちゃんはバトカー乗務経験あり、厳しい講習をパスした腕前、ルールに則った素早い運転は見事、誰しも追いつけやしない難なく天現寺ランプに入った、マキはほっとした表情でスマホを取り出す。

「一平、追尾らしき車は出なかった、自分の方は上手くいったよ、そんで大収穫」

「追尾らしき車両はなし我々もいっぽくに向かう、それよりも大収穫とは何だ、松ちゃんが手でも握ってくれたのか勿

体ぶらず言えよ」

「一平たら、それはそれでいいけどそうじゃーないの、夏目浩二はピース王国一等書記官補佐の白家秀忠でした」

「それは確かか、危険な動きして聞き込んだのと違う」

「リスクも何もなかったよ、自然に相対していたら向こうから言ってきただけ、詳しくはいつぶくで、松ちゃんもぼつちし撮った、一平の言った通り再配達電話番号だって記入したよ」

「そーかよくやった、先にいつぶくに行つてくれ、まりがお昼を用意してると言つてた、大成果も加わり美味い事間違なし」

「今日いつぶくは休みなのー」

「失敗は許されないし正負はあるが腹もすくだろう、今日の為に数日前から、まりは開店時間を遅らせる張り紙をしていた」

「キッホー最高、どんなランチか楽しみだ急に腹減ったよ」

「マキ！人並みに女だろう、腹減ったよとは女性が使う言葉ではない」

「そんな事言つたつて何時も使つてる、一平が知らないだけ」

「大さんとこれからの捜査法を相談しながらいつぶくに向かう」

一平はまりに電話を入れた。

珍しくマキは疲れた表情でいつぶくの扉を開ける。

「マキちゃんお帰りなさい、疲れたでしょう取り敢えずコーヒー、こちらがマキちゃん好きな刑事さん」

「まっまりさん、そんな・・・」

僅かに頬を染めマキが言い返した、まりは更に一平から聞いていますよと付け加えた。

「先日道場で拝見させて頂いた出刃捌き、鮮やかだった今日はステーキを私が焼きます、今サラダとオードブルを作

っています、アッそれにポタージュスープ」

「私にも何か手伝わせて」

「それじゃー席と鉄板を用意してもらおうかな、裏口に置いてあります。鉄板は店の中央に置いて、テーブルは半円状と言いかコの字かそんな風に並べて、鉄板の上から折りたたみ式排気管を支柱と一緒に伸ばし裏口に」

「これでいいかな」

「はいそれでいい、調味料は鉄板脇の木の部分へ」

マキと松は一月と言うのに上着を脱ぎ腕まくりし迅速に作業。

まりのスマホが鳴った一平からだ、今調布に着いたタクシー拾って帰ると言う。

「マキちゃん好みの刑事さん、鉄板に火入れて強だよ」

頭掻くも松はメインスイッチ右に回した、カチンと音をさせ強に合わせる。

「マキちゃんお願い、六皿用意してサラダを盛って、それにスープ用に六皿用意しといて、あつスープの火弱めて、ありがとうこれで準備できた」

マキがさつきから怪訝な顔をしている、まりはそれが何故かは知っている。

「ただいま」

一平と大さんが入って来た、すぐさま一平はマキの両肩をそつと手を添え、でかした、よーやつてくれたと礼頻り。

「自分は保育士をしているが刑事の娘です、ぬかりない」

「大成果だ、補佐官白家秀忠との落ちついたやり取り、無線で聞いていた、しかも再配達用紙に小生指定の電話番号を忘れずに記入した」

そんなマキを一平は想わずハグしてしまった、そんな二人に三人は拍手。

「お腹空いたでしょう、ステーキ焼くからね、その前にコーヒーで乾杯しよう一平音頭取って、皆も席について」

「席につけたってどー座りゃーいんだ」

「そうだなー一平は右端で隣が大さんに松ちゃん、マキちゃんどう」

「まりは鉄板の前でいーんだよな、そーすると席が一つ余るんでは」

マキがさつきから一つ多いと想っていたと言う。

「そう言えば怪訝続きな顔してたっけいまに分かるよ、マキちゃん冷蔵庫から牛肉持って来て、それにサイホンにコーヒーが出来ているカップに注いで」

はい、一平には兎も角まりには素直だ。

一平はすくつと立ち上がった、今回の成果に多大なるアドバイスと尽力頂いた大さんに乾杯の音頭を願った。麻布署きつての強持での名刑事も褒め言葉に苦手なのか戸惑うも立ち上がった、乾杯ですねと言いおもむろに言し始めた。今回の功労者はわしではなく氣転を効かせたマキちゃんだ、署の婦警さんにも学ばせなければと想っておる、尚、一平さんの協力者が一人増えた事を付け加えさせて頂きます。監察室に歳はくっているが日本酒が好きな女性が居る、わしと時折お銚子傾ける仲だ、それと無く監視しといってくれとお願いしと言う、何かあれば直ぐ情報を入れてくれる筈です」

と前置きしコーヒーカップを高々と差し上げ濁声でカンパイ。

まりは小紋の上からタスキの片方を口にし右手を素早く交差させ袖を絡ませ襷掛ける、遅くなりましたと今風な女性が大型トランク持参で入って来た。皆あれつとした表情だがまりが笑顔で。

「一平！、のりちゃんだよ忘れたの」

「あーいたー、ごめん」

「皆さんに紹介します、こちらはCAの松下紀子さんです、昨年五月にキスゲ橋で事故死したピース王国の事務官松下翔平さんの奥さんの紀子さん、のりちゃん、マキちゃんは知ってるよね隣は麻布署の刑事の大泉さんと松宮さんです」

「初めまして宜しくお願いします、松下紀子です。一平さんには申し訳ないが時折まりさんと電話だけで話しているの、世間話等だけど安らぎを感じるんだなー、でつい電話しちゃうの、一昨日夜札幌から電話入れたら今日お昼にチームいっぷくメンバーが集まるよ来ないって誘われたの、オフが始まる日だった一つ返事ってー訳」

「おおーいそのーチームいっぷくってーのは何だ」

一平が言い出しまりを見た。

「私が勝手につけた名で一平を取り巻く人たちの集まり」

「大さんや松ちゃんに了解取ったのか」

「一平さんそれには及びませぬ」

二人は暗黙の了解とコックリ。

「のりちゃんご主人の事故死いや他殺・・・、遠回りだけれど外堀から埋め始めている、ご主人の無念を晴らす日はきつと来る、待っててくれ、ジブリ近くのワンルームマンションで小荷物を不審な行動と共に受け取った男は警視庁監察官の相谷茂樹であり白金センターから送った人物は補佐官白家秀忠、であって二人は何故に偽名で行ったのか。

小生はこの二人がピース王国書記官松下翔平さんの死と関係あるとみている、今後の捜査方針を大さん達と練る予定だ、ゴメンつい長く喋ってしまった。まり頼むよステーキを」

あいよ任しといて、厚みのある霜降り牛を六枚鉄板へ載せた、姉さ被りが意気に見える。

「マキちゃんお願い、ポタージュスープを鉄板の端に置いて」

「これでいい」

「そうそれでいいよ、それにサイホンが置いてある棚の下に大小の皿がある、人数分用意して、フォークにナイフも箸も必要だろうお願いね」

マキがテキパキと事を済ませた。煙と匂いもあるが換気扇のお陰でさほどでもない。

有無を言わず鉄板にニンニクを三欠片、ヘラで返すが如く動かし満を持したか、はーともよつともつかぬ掛け声と共に中華包丁の平でニンニクを潰し刻み鉄板の端に、再び掛け声を発しコシヨウ容器を頭上高く投げた、素早く一回転し右手でキャッチ、パッパと振り掛けた、皆は啞然とし固まったがのりは堪らずラップ調リズムを取った。テーブルを叩き、まりの動きに合わせハイ、コシヨウパッパ、焼け具合どうかな、パット回ってサンシヨウキャッチ。

リズムカルに牛肉をひっくり返す、他調味料を取り頭上に、今度は右回転し左手で受け右手でトントンし振り掛けて行く、時には焼き具合見るかヘラでリズムとってんのかトントンと鉄板叩きながら牛肉に添えた、一連の動作を数回繰り返したところで牛刀とヘラを持った。

右足を曲げ左足を伸ばした小紋の裾から脛脛、膝上まで頭わになった所で皿にレタスが載ったワゴン、左足袋先が届く、曲げてあった右足を伸ばしながら左足で引き寄せた。

一平は何てー格好するんだと言った表情、のりのラップは止まらん、それに合わせるか牛刀とヘラを動かしサイコロとスライスにカットしニンニクを添え皿に盛り付けた。まりがラップを引き継ぐもののりの叩くリズム音は変わらない。背側に置いてあるワゴンにライスとパン、サラダあります、鉄板脇にポタージュスープが温まっています、容器もそこにあります御自由にてラップは止まった、拍手喝采。

「陸奥出身の男性がアメリカで成功治めたステーキハウス、彼が焼くときのパフォーマンスを一度やって見たかったの」と言い、まりは柄にもなく照れながら姉さ被りをとった。

「豪華版なランチ堪んねー最高だ、紀子さんのラップもgood、三ツ星レストランだって味えんよな、奥様ごっさんです、又は無いと言うが又あるんよね」

松が言い出した。

「松、何いているだ、奥さん紀子さんに向かって」

「いいじゃないの、いっぱい食べてって、それよりも一平と付き合っていると一平言葉が移っちゃーない様に気いつけてね、

たまんねーとか」

「奥様、お言葉を返すようですが一平さんには一平流があるようです、僕には僕流があります、・・・」

松が言う。

「奥方が返答に困っちゃう、黙らんかい」

「大さいいいのよ、自分をすっかり知ってるし迷いのない言動もそうだしマキちゃんから聞いている、視野を広げ前向きだつて、これからもチームいっぶくには欠かせんよ。大さん、そんな事より残さずに食べてね」

分かったとばかりサイコロを二つ放り込んだ。その後はパクつきながら雑談に・・・

「ところでまりさん、あの大荷物は何だいな」

あそこに二段棚を拵えたでしょう、あそこに置くのとまりが言う。

「いつの間に作ったんだ」

「二週間前、のりちゃんと話してて私が了承したの」

「何を置くんだ」

「のりちゃんから話して一平は怒らんよ」

小生の知らぬ間に何やらしやがったな、一平は二人の顔を見合わせた。

「こないだ話してたらまりさんが千歳でのホテルで、のりスマイルで数々の曲を披露してくれた、その歌又聞きたいなど言つた。いいですよ千歳では一週間は一回は歌っていますよ何時でもどうぞ、とは言うもののおいそれとは行けない」

「孫に会いに行くそん時、例のホテルに泊まれば可能、一平にどう説明すればベターかお宮参りもあろう、そん時でも等々思案顔。突如閃いたと言いました」

一平とマキに刑事さんら四人は神妙な顔して成り行きを見守っている、まりは微笑みすら浮かべながら後片付けをしている。

「まりさん、いっぶくで唄わしてよ、そうすれば一週間に一遍は聞けるよ、自分もチームいっぶくの人達とも会え行動が広がるし、安らぎの場も増えしかも歌えます。まりさんお願い一平さんに頼んで」

のりは一方的に喋り捲った。

要約一平は事態を飲み込めたかまりに向きながらそのーと言い出した時、洗うを休めてまりが一平に。

「許可、そんな事いいから機器持つて来ちゃいなさいよって言ったのいいでしょう、一平だって満更じゃないんだから。早速今晚からお願ひしたのセットするの手伝ってあげてよ」

立ちすくむ一平をしり目にマキが洗い物に加わった、大さんと松ちゃんは排気口を取り外し洗い終えた鉄板を所定の場所に戻す。ピポン、まりが受け取る様に一平に目配せした、宅急便の配達員さんがいっぶく内の松下紀子様荷物です。ウウム一瞬たじろんだがご苦労さんとサインした。

「洗い物はもうすぐ終わるから梱包開くの手伝ってやってよ」

何の事やら分からず仕舞いながら開き始める、コンパクトだが音響機器の様だとか小声でブツブツテーブルに。

「コンパクトでも重いよ棚に運んであげて」

一平は言われるままに、のりがアンプにミキサーにエレクトーンをつなぎ始めた。

「一平さんそのスピーカー上段の両脇に置いて下さい」

あたかも孫に言われ、眼を細めながら手伝いする良き爺っちゃんの様だ。

「洗い物は終わったしテーブルも元に戻った、のりちゃんの方はどう」

「コードが混がらかつちやったがもう少して終わります」

じゃーコーヒー入れとこかなとまりはカウンターに入った。

「一平、のりちゃんにここで唄ってもらっていいでしょう」

「セットは終わった良いも悪いもねーだろう、まりさえ良ければ」

機器の裏を覗き込みコード確認するのりの横顔が微笑んだ。

「のりちゃん良かったね、内心は表現出来んほど喜んでるの、一平は照れ屋って言うか恥ずかしがり屋なの、あつそうそう、大さんと松ちゃん名刺代わりにのりちゃんが一曲披露するってさー、時間が許すなら聞いてって」

「今晚は宿直があるがそれまでに返れば」

「宿直とは知らなかった、大変な職務があつたのに引き留めしちやって御免なさい」

「それには及ばぬ一平さんもご存知と想う、何もなければ自分の時間が持てます」

「何もない事は願います、のりちゃん準備で来たー」

「はい機器のテスト始めます、この器械優れもの、まずはドラム続いてベース、鍵盤で弾く事も出来、自分で勝手に演奏始めるの、こーいうふにダイヤルを回していくとピアノ、ギター、三味線音を奏で始める。試しにやってみようか」

ドラムとベース、エレキギターで♪ドーンドコドコドーンドットとキャラバンがスピーカーから流れた、テスト完了。

「学生時代の仲間がドラムとベースを担当し自分がエレキトーンを奏でました、往年の歌謡曲が二千曲以上この中に入っています」

「のりちゃん、大さんも松ちゃんも次がある、急がせはしないけど始めて、マキちゃんも一緒にね」

まりは言う、マキは慌てるも多少は歌の心得がある、まりに肯いた。先程のキャラバンが小さめに流れ始める、白のワイドパンツに黄色の七分袖でのりが登場、拍手の止むのを待って徐にしゃべり始めた。

「今宵いやまだ明るいな、午後のひと時、いっぷくでおくつろぎの皆さま往年の歌の数々をお送りさせていただきます、あの歌この歌に想い出募る事でしょう、あなたにそちらのあなた方にお送りさせて頂きます、私の父が良く見ていた西部警察パートⅡ、そこで豊島ひとみさんがギター抱え女心を歌った通り雨から」

一礼し数あるスイッチやつまみを操作し鍵盤を叩き、♪夜更けて裏町明かりが潤む・・・、一小節終わるとスイッチを触り自動演奏に切り替えた。

「あなたあなたも男の方々様、女心を垣間見る事が出来たでしょうか、続きましてはチームいっぶくの女性武闘家で名高いマキちゃんとのデュエットをお送りします、皆さまもよくご存知の曲、忘れもしないこの曲、ここかしこのカラオケボックスで歌い繋がれています。ザ・ピーナツのナンバーから恋のバカンス」

ベース、ドラム音がイントロを流し始める、ギター音が加わる。

♪ためーいきのーでるよーなー、二人は初めてとは思えん息の合った歌い方身体の動かし方、一平は想わず体で調子を取りまじめる、大さんも松ちゃんも、・・・こーいーのバーカーンスーで向き合いハイタッチで締めくくった。

「いやー懐かしく聞かせて頂いたよ、次回はいつだ」

「大さん、のりちゃんの乗務、私用もあり日にちは決め兼ねるが周一遍はここで唄って頂けます」

「了解、一平さんとの捜査方針等で何度も会わねばならんと想う、こちらにちよくちよく邪魔させて頂くよ」

大さんと松ちゃんは立ち上がりスペシャルランチ、懐かしい歌をありがとうございましたと皆に礼し無垢扉を押した。まりが追って出た。

「大さん、捜査協力有難うございます、けどあんな浮かれた一平見て捜査、調査任せていいのだろうか、しかも相手は大使館と監察官だ、大丈夫だろうかそう想いにはなりませんでしたか。だけどそれが一平のやり方です、嘗て赤穂浪士と言うか忠臣蔵を見たと思います、仇討ちを想い活気盛んな浪士達をよそに赤穂を発った大石内蔵助は途中で酒と女をはべらかせる毎日を送った、なかなか来ん首謀者内蔵助を浪士達は愚痴を零すまになった。しかしそれは敵を欺き内蔵助流に策を練っていた、甲斐あって討ち入りには邪魔も入らず見事上野介の首を取った、策にあつたかは不明だが浪士達を人切り悪人にはしてはならない、家族もいる、全員首切り刑を免れ切腹へと導いた。大さん御免ね訳の分らん事言いつてしまつて」

「奥さんの言わんとしている事は分かったよ、現役時代上司の言などどこ吹く風、縦横無尽、一平流に動き回り難事件を悉く解決した、そこには更迭が脳裏に有ったやも知れない、難事件に直面したら部下達にそれなりの言も言

う、が決まって上司の眼を盗んで居酒屋、カラオケへ連れて行ってドンチャン騒ぎをしたと聞いている」

「大さん良く知っていますね、難事件に関わり始めると私の有無などどうでも、突如ランチ行こうとE便が入りどこどこに何時、そんな事もありました。捜査はどうしたのと聞くと半休取ったと言うの、分かるでしょう難事件中に上司が半休などくれる筈がない、首飛ばされちゃうよ。その店カラオケあるんだ昼から八丈の何とかって言う焼酎のロック片手に調子っぱずれで、十八番と言う高校三年生、私にデュエットで二人の大阪歌わしては燥いでた。これ間違いないく更迭もんですね、でも二週間、一ヶ月、三ヶ月もつと掛かった年もあつたかな一平の携わった難事件は皆さまのご協力を得解決。のりちゃんの歌を聞きつつ体でリズムを取り、笑顔で何とも言えぬ掛け声をかけ燥ぐ一平を久々に見ました。内蔵助が大事前に大燥ぎした、私は今日の一平と重なる様な気がします、相対すは大使館と監察官、へマした時のリスクはチョーでかい、大さん等の許せる範囲で協力をお願いします」

「わし等から臨み始めた事、半ばで消えやしませんご心配なく」

と言いつつバス停方向へ行った。

「大さん帰ったかい、なんか鼻がムズムズする」

「これからお手伝いさせて下さいと言ってたよ」

「それだけだったか、それにしちゃうがすぎるな」

「あつそう、表で馴染めさんが通ったから二言三言」

「まりさん、一平さんに今宵の事喋っていい」

とのりが話しかけた、いいよとサイホン洗いながら返事する。

一平とマキは何を話すんだろうと顔を見合わせる。

「まりさんが一平は怒らんよのりちゃんから話しなよと再び言われました。今宵午後八時十五分にいつぶくでサブライズがあります、お手隙でしたらお越し下さいと、近隣の馴染さんに電話入れました。無論隣接する署の馴染さんに

も、と言う訳で今宵は忙しくなるよマキちゃん手伝って、それに一平さんも」

小生は何なんだと言わんばかりにまりを見た。

「言わなかったって分かってんでしょ、無料奉仕お願い」

はーと何でもござれと息を抜くような返事。

「三鷹署への連絡は」

「もちしたよ、刑事課課長さんにね」

「父っ様来んのかなー」

「来ると想うよ未だ大事の事件は無いと言っていた」

「よーし来たらこき使ってやろう」

「マキちゃん村上課長さんが来れば部下の方も同然みえると想う、自宅ではどうこうと言わないがここではお父さんを立てておやりなさい」

まりの言にマキ小さくヘイと答えた。

「よーし支度は終わった、六時開店だそれまで自由行動としよう。小生は二階で一休みしてくる」と一平は出て行った、のりは機器を二人に説明し始める。

マキが言った。

「これ使いこなすの大変だったでしょう」

「でも好きは何とやら、そんなに日にちは掛からなかった。ドラムとベースそれにピアノを合わせるのがちよいと苦労した位。後はセオリー通り操作すればいい」

まりが言う、

「今宵これ等を誰が操作するの」

「自分一人で出来ます」

まりとマキはほっとした表情。

六時の開店時は十人程だったが七時には二十坪の店内は満席になってしまった。

「まり、厨房はどうなってる」

「マキちゃんがいるから大丈夫」

「まだ七時だぜ席が足んないよー、三鷹も武蔵野、小金井も見えてないが来てくれるとして席がー、のりちゃんの出番を早めたら」

「だめよ時間通りやんなくっちゃー店の信用に関わる」

そんなやり取りを察したか一人の男が一平の前に来た。

「一平さんご無沙汰しています、府中交通課の稲垣です」

「いっぶくをご利用下さいましてありがとうございます」

「ご繁栄でお困りの様ですね、想いきつて今宵は立席にしたらどうですか、カウンターのトンボと幾つか椅子を隅に残しコーヒークップを置けるように、三テーブルを中央辺りに置けばいいんじゃないか、一平さんか奥さんが音頭取ってくれば誰も異を唱える者はいない。どうですか私の提案」

一平は戸惑いながらまりの脇にいく。

「提案受けてみよう」

「私が言います、それと私の提案ですがコーヒー飲み放題、トーストは限りあるが無料では」

「まりさえ良ければいいよ、パンが足りんでは」

「補充すればいい事、稲垣さんにOKして」

稲垣巡査長の所に行き了解しましたと言う、まりは巡査長の顔が綻んだのを見定め、すくっとカウンター前に進み

お客様に話し始めた。話が終わらない内に拍手が起こった、稲垣巡査長は周りに声を掛け立席作り。

一平はカウンター内に行きコーヒーは良いがパンをどーするとまりに、マキが言い始めた。

「父っ様が来ていない、来る筈だ取ってきてもらおう」

スマホを手を取った。

「来る来ないどっち・・・それなら駅前通り角から三軒目のパン屋さんに寄って来て、電話しておくから食パンのWサイズ二十本取って来て」

まりはそれを聞いてパン屋に電話入れた。

八時を回った、一般客もいるようだがお巡りさんで飽和状態に、江戸仕草しばしの店内、マキの父村上捜査課長もエプロンにバンダナ姿でトースト作りに奮闘。

八時十五分を回った一平がまりに言う、時間だ、もう良いだろうまりも肯く。

「のりに任せた、自分流にやれ！」

一平はキツとのりを見つめ言った。

店内はルールぎりぎりまで暗くなつた、皆、何事か天井を見上げる。スポットライトが一角を照らし始めた、ワイドパ
ンツにハッピー衣装はANA、CA風、エレキサウンドの軽快なリズムに合わせてのりが現れた。

お巡りさんも人の子、歓声挙げるや指笛鳴らすやYYどころでは無い、徐にのりがしゃべり始めた。

「こんばんは いっぷくにお越し下さいました皆様こんばんわ、今宵いっぷくでのひと時自分がお引き受けいたします」

村上課長が手を休め見入っていると隣のマキに脇腹突つかれ我に返る。

「自分は現役のANA・CAです、一平様ご夫妻とフライトが一緒になり、お知り合いとなりここに招かれました。自分が持っていると言えば歌しかございません。今風な曲は苦手ですが昭和の曲には対応出来ます、先ずは挨拶代わり、名刺代わりに自分が作詞作曲しました（札幌最終便）、題名からすると別れ淋しさが感ずると想われます、差に在

らず、自分は陽氣が一番です、リズムにのった楽しい曲です聞いて下さい」

シンセサイザーに向かいマイクを引き寄せた、ドラム音がタツタカタツタカと響くベース音が合わさる、鍵盤を十本の指が叩き始める、♪星と月に見送られ北に向かう最終便と歌い始めた。

皆聞き入っている、人々をハッピーエンドで結ぶリズムミカルな歌だ、ピロンと曲は終わった。

「自分にも悲しい時淋しい事も多くありました、がいつまでも想い込んでいてはタブー、頑張り前向きで行こうと歌が支えてくれました。そんな自分を支え続けてくれる歌の数々、今宵、いっふくと共にお送りさせて頂きます、お聞きください。昭和三十年頃だったかフランク永井さんの（有楽町で逢いましょう）、お聞きください、♪あなたをまては・・・ゆうらくちようであいましょう、やんやの喝采だ。マイクを持ち立ち上がりカウンター前に、皆様、右手をご覧下さい二重橋でございまーす、♪東京だよおっかさん」

リタイア組と思しき方も何人かいる、諸てを挙げて拍手、お富さん、浅草姉妹と続けた。

「三鷹署は村上捜査課長さんが焼いて下さいましたトーストが出来きました」

のりのそれを聞いた村上課長、チョーでつかい皿にトーストを山ほど重ねた、適量サイズにカットした津軽産リングをそれぞれのテーブルに、ジャムとハチミツと一緒に運ぶ。

「課長さんが焼いたり、剥いたりしたんだって美味いに決まってるよ」

若手のお巡りさん達は手を伸ばした。

のりの額に薄らと汗が見える。

「のりちゃん、おしほり冷やしといたよ一息入れましょ」

「まりさん有難う、ノリ過ぎて力が入っちゃった」

トーストの山はみるみる低くなっていく、のりも汗拭き冷っこくしたコーヒーを、低くドラムとベース音が流れ始めた。

「皆さんの手と口はそのままでお耳だけ貸して下さい、昭和後期から平成へかけてをお送ります。だけれど勉強中で

す、苦手な曲もあります、とつちたらご容赦、先ずはビージョーズナンバーからステインアライブ」

鍵盤を叩きながらのりは言う。

「一平さん達も知り合った頃よく行ったそうです、ディスコにそして踊ったそうです、ちよいと狭いが我と想うお方は踊って下さい」

アラフォーと思しき婦警さん三人、お盆をクジャクの羽に見立て、歌とリズムに合わせて軽妙に肢体を動かす・・・、調布署の皆さんでした、拍手が起こる。

「さすがー昔取った杵柄ですねー、皆さんにもう一度拍手、自分も頑張んなきゃー、荻野目洋子のナンバーからダンシングヒーロー」

一小節が終わるとスタンドマイクをセットし振りを交えて歌う、・・・、AKB48からは会いたかったを飛び跳ねながら歌う、エクザイルはチューチュートレイン、脚を踏ん張り上半身を回しながら歌う、若手刑事さんが後ろで同じ動作、曲が終わるのを見定めまりが中央に進み出る。

「歌は尽きませんがこいつぶくは午後九時までの営業です、後十五分で閉店となります、名残惜しいのは私も同じ、よつて後一曲のりちゃんにお願いし今宵はお開きとさせて頂きます」

何処ともなく拍手が起こる。

「のりちゃんは今日だけではありません、来週もその次も歌ってくれます、私ものりちゃんも皆様をお待ちしています、宜しく願います」

「皆さん又コーヒー飲みに来て下さい、自分の歌を聞きに来て下さい。最終ナンバーは明るく元気よく、好になった人で」

ノリが言いイントロが流れる、右に左に時には右手を頭上高く挙げる、その姿は熱唱する都はるみだ、皆と握手・・・手を振り、♪すきになったひとー。

さすがは警察官心得たもんだ、声かけ合いハイタッチし楽しかった又ね、のりとまりに声かけ無垢扉を押し始めた、稲垣巡査長が若いもんに声かける、テーブルと椅子を元通りにし一平さんと声かけた。

「まりさんから聞いたよ歌姫、のりさんのご主人の事を、あつしもチームいっぴくに入れて下さい、捜査半ばで本庁に持つて行かれた、どうも腑に落ちんのよあの一件、どの程度お手伝いできるかはだが、あつしにも手伝わせて下さい」

一平がコックリするのを見定め一礼し外に。

「九時回ったよ、後のかたづけはやるからプライベートの時間になったよ、レミーマルタンが待っている一平さん」と村上捜査課長が声かけた、そーするかと言ってまりに目配りし出て行く。

「動きつ放しで疲れもある、腹も減ったー残りもんだけど食べようよ」

まりのその言葉に合図されたか皆テーブルを囲み腰かけた、歌はプロ級だね、父っ様がのりに声かけた。

「はい、以前二度ばかり歌い手に成らんかと声かけられた、テレビに出演したりステージでお客様とトークしながら歌ったり楽しいと思うけれど、拘束されるは自分の時間も無くなってしまう、C Aだつて拘束はされるがご搭乗者様と楽しく接しも出来る、オフは自由に時間が持てる、そんな今の生活が楽しい、とお断りしました」

「おいしいな、のりちゃんだつたらヒット間違いないと思う」

「自分位だつたら他にも大勢います・・・」

「父っ様、いい加減にして、のりちゃん返事に困っているじゃーないの」

マキに遮られた。トーストがなくなつた所でマキは、ねー、のりちゃんと声かけた。

「日付が変わるには間はあるが遅い、内に泊まらない、昔ながらの障子と唐紙、木材むき出しな家だけどシャワーとウォシュレットは設備されている、父っ様いいでしょう」

無言で肯いた。

「よっしゃー決まつたまりさん、のりさんは内に泊まって頂きます」

「相分った」

「まりさん、その相分ったては一平仕込み」

「日に何度も聞かされれば、いつしか私も使うようになってしまった」

シャワーを浴びバスロープ姿で一平はレミーマルタンを嗜んでいた、ルパン三世が喚き始める、大さんだ。

「いやー夜遅く申し訳ない、昼のステーキ美味かったよ、まりさんいる」

「まだ階下だここにはいない」

「そうかそれなら言ってくれ美味かったよと」

「はい、お分かり申した。ところで何か用事でも」

「うおうつ、そうだ上官が早く帰ればいいのに今帰ったところ、連絡が遅くなってしまった、早速動きがあったぜ、歳くつているが監理官室詰め、年齢不明なお嬢さん、わしが麻布署に帰ると同じして電話掛けて来た。相も変わらず部屋でパイプたばこスパスバやつてるんだ、換気扇付けたって煙くてしょうがないとぼやきにぼやいた、場所を弁え紳士的に吸ったら如何と、そうしたら上目線たつぷり、私は監察官だここは私の部屋だつて、と前置きして言い出す始末。お帰りになったのでお茶を入りに食堂脇の茶場へ、戻りノックしようとした時、戸を隔ても聞こえる電話の大きな声、ドアノブから手引つ込め聞いちゃった。一平さん年齢不明なお嬢さん良くやつてくれたよ」

「電話の内容は何だったか早く聞かせてくれ」

「宅急便で三鷹の荒木田輝夫から大使館、夏目浩二宛に査証申請書類が届いた、それでどうした。その様な人物はいないと言ったら再配達書置いて行つた、書いてある番号にしたら相谷さんに繋がってしまった。ばかたれ白家！、俺の電話番号忘れたのか、迂闊な行動をしてしまった申し訳ございません。それにしても何だか変だな、俺達の間係を誰かが調べ始めているのか、ここでお嬢さんはノックし部屋に。監察官は慌てて話を放らかし、はい宜しくと言って電話を切った。どうだい一平さん、黒目が大きくなっただろう」

「大さん、大きく艶が出たよ」

「連絡したいのは以上だ」

「ありがとう、今宵のレミーマルタンの美味さが増したよーだ」

一平は見えんもせんのにVサインし電話を切った。

「のりさんと夜通し話するかも」

とマキから階下より電話が入った、事情が分からん一平は口籠り。

「明日は幼稚園あるぞ、どーするんだ寝坊すんなよ」

はーいと済んだ返事。まりと村上捜査課長もいる、案ずる事はないだろう、レミーマルタン飲み干しベットに潜り込んだ。

「マキちゃん頼んだよ、のりちゃんを」

と、まりに見送られミニに乗り込んだ。後部座席で父っ様が窮屈そうだ、安じたのりが声を掛ける。

「課長さん、申し訳ございません自分の為に」

「ご心配なく慣れている」

「それにしても横向きだなんて」

「十分位で着く父っ様、辛抱してね」

マキはマニュアルの68年製のミニMKIIを巧みに操る。

「この車一平が四十年前中古で買ったの、早馬IIを乗り出し暫く車庫で眠っていた、が自分は歳が来ると共に免許を取った。半年ほど友達の車を借りて乗ったりしていた、とある日いつぶく裏手にシート被ったミニを見つけしまった。このままじゃー淋しがっているし錆び付いちゃうよ、等で永代使用権獲得、今でも税金に保険に車検を含め整備費用は一平の所に行っている」

「じゃーガソリン代だけじゃーないの」

「いや、洗車や日常の手入れはするが一緒に出掛けた時は一平持ち」

「そんなのあり」

「のり、そんなのありです」

そうこうしてたら道場の門をくぐり母屋脇のカーポートに、玄関で道主村上一太郎がどてら姿で出迎える。

「爺っさま、待っていなくったつていいのに」

「今出てきたとこだ、今日はマキは大活躍したそうだな、のりお嬢さんのいつぶくデビューも大盛況、二人は疲れている
労を労って下さいとまり女将から電話が、囲炉裏に薪をくべといた、シャワーとやらも使えるが湯殿は良い湯加減にな
っている、二人とも疲れを癒され、わしやー寝るどよ」

「爺っさまありがとう、のり入ろう」

二人はマキ、のりと呼び合う仲になっていた。マキの父裕太郎、三鷹署捜査課長は俺はどうなんだと爺っさまと二人
に言わんばかりの表情。

いつものように一平は朝散から帰り二階に上がろうとした時、おはようございますと軽やかな声、ミニに乗ったマキと
のりだ、昨日は楽しかった、のりを送り幼稚園に行ってきたーす、違和感ながらも軽快なエキゾースト音を残し視界か
ら消えた。

ただいまと言って台所に声を掛けた、もう少しで出来るよ新聞ここに来ている見てて。一平はラジオを馴染の局に合
わせ新聞に眼を通した、一平の気を引く様な記事はない、無論ピース大使館にまつわる話も載ってない。朝飯で来た
よの声で新聞を畳んだ。

「キノコも含め具沢山のおじやです、食べてー」

卵でとじてあった。

「今朝はやけに冷えるな、アツアツをふうふうしながら食べる最高だな、それにしても監察官と書記官補佐の白家秀忠は繋がった、しかも何故偽名を使っても小荷物の授受したか、まり、どー想う」

「一平に分からなけりやー私が分る筈ないよ」

「おーそーか」

そう言つてふうふうしながらおじやを口に、まりが言い出した。

「相手は大使館と監察官、真正面から行つたつて勝ち目がない、偽週刊記者の名刺じゃー相手にならんよ。ここん所、稽古ご無沙汰してんじやないの道場に行つていい汗かいて来たら」

「大さんと松ちゃんに頼めば捜査は可能だが二人にリスクが、更迭でもされたらことだ、よーし食べて一息入れたら道場に行つて来る」

九時過ぎ重低音を響かせ早馬は道場の門をくぐった、所定の場所に停め道場へ指南役が近隣の奥方等を指導中かそれらしき黄色い声がする。

「一平殿ご無沙汰気味やないか」

背後から道主は村上一太郎が声をかけた。

「事情はマキちゃんから聞いていると想います、皆のお陰で一段落、でも身体が鈍っちゃーうと遺憾、てな訳で登場した次第」

「鈍ってしまったか、わしが見て進ぜよう、道着に着替えなされ」

「稽古やめーい、今から模範演技をお見せ致す、奥方はその板塀に沿つてお座り下さい、指南役とこちらの谷端一平さんとの実戦さながらの稽古をお見せ致す、両名こちらに」

二人は神棚を横にしながら向かい合った。道主の始めと共に一礼し構える。

指南役がいきなり気合いと共に飛び上がり一平の頭上から足裏で額めがける、体制を低くして左手で払う、指南

役は払われた力を利用し後回転、すくつと立ち腕を取りに来る、その腕を捻じりあげようとした、一平は捻じれ方向に体を回転する、凄まじい光景にご婦人方は声も出ず仕舞い。すかさずけりを打つも空を切る。互い向かい構えた指南役は一平より三寸は高い、諸手を挙げじりつじりつと近づく、捕まったら勝ち目がないフェイント気味に手を取りに行く、力ずくで腕をとろうと前に出て来た、素早く懐に入り指南役の出て来る力を利用して担ぎ上げ腕を取り前方に投げた、北野流の使い手だ容易く投げられはしない、でっかい体を丸め回転しすつと立った。睨み合いが続くご婦人方は成り行きをキツツと見つめた、一分二分二人は不動の姿勢のまま。やめーい、道主が終わりを告げた、向き合い一礼、神棚に向き直り一礼。

「ご婦人達は各々稽古に励んで下さい、指南役と一平殿はこちらに」

と言つて裏手櫓の下に連れて行つた。櫓を背に道主が座る、道主に向き合うように二人を座らせた。低い声で喝を入れるが如く言つた、アグレッシブに欠けている。

「指南役、北野流は塀などに跳び上がった空中回転は当たり前、要所にそれが見受けられたが今日の対戦では指南役の悪い所が出てしまった、それとわしの可愛い孫娘の年の離れた彼氏」

二人は顔を見合わせクスツとしてしまった。

「何か変な事言つたか、わしは真摯に物言っている、二人とも真摯に聞いて下され。指南役は孫娘の一平殿、そう想つて対戦したのではないか、相手が誰であろうと常に持てる力を出し切り対戦せねばならぬ。」

一平殿、迷いがあるのでは、一線から遠ざかった今現役の様な戦術に拍がない、気の迷いがそうさせている、孫達と捜査している一件に在りそうだ、自分流刑事時代を想い出しその件と相対されたし、事故現場にでも行ってみたら」

その後三人は櫓に向かい正座し一時間を過ごした。

「腹減つたー昼は、トーストでもいい食わしてくれ」

「つたくもう、二人の子供が小学校時代帰つて来ると何時もそう言つてた」

「浅間山方面に鳥撮りに行ってくる、何でもいー」

「二階に漬けとアサリのみそ汁が用意してある、ごはん温めて漬け丼では」

ありがとうと言って二階に、道場で何かあったのかしら、一平のはしゃぎっぷりときたらとまりがブツブツ。四半時せんにうちに行って来まーす。

仲間がいるポイントに、いつものメンバーに永尾さんが加わっていた。素浪人殿久し振りと手を挙げここだと招く。

「シジュウカラに交じりエナガがジージツジリー、時折年に一度お主が一刀彫を購入するであろうウソも出るよ。ここに三脚を立て待っていれば来る」

「忝い、何時もながらではあるが半時で二百枚を超えるかシャッターを押してしまった、こんなかに何枚か使える画像があるだろうか、永尾さんに聞いた」

「心配には及ばぬ、自信を持ってシャッター押せば多くの使える画像があります」

そう言われた一平は安堵と共に三角マークを押し納得。浅間山の方に行って来ます。鳥撮り猛者さん等に一礼し向かう。

多磨霊園から浅間山に続く緩やかな登り路に行く、二十人ほどの園児達に会おう、こんにちは、保育士さんに指導されているんだろう元気な挨拶、保育士さんは良く出来たねー、はなまるだよ、小生も手を振り返した、中にはハイタッチを求めて来る園児もいる、キスゲ橋が見えて来た。

橋のたもとで合掌する。ここに事故死いや殺人に繋がる手掛かりがある筈だ、コーヒーを飲みながら見渡した。地元の人だろう、作業着姿の人が枯草を掻き分け空き缶やペットボトル、細かなゴミを拾っていた。なかなか出来るものではないご苦労様と声かけた。一平はつり橋の中央辺りで立ち止まり、ここから落ちたんだ、と橋下の白いラインと立っている場を見比べていた。

「一平さんじゃありませんか」

先程の作業着姿の人が声掛けて来た。

「私です、府中署交通課の稲垣です」

「いつぞやはコーヒーショップでのご協力有難うございました、後片付けまでして頂いてまりも喜んでいました。で、いつもここを掃除しているんですか」

「はいと言いたいところだが今日が初めてです」

「では如何様に」

「一平さんはあの事件の手掛かりを求め来たんでは」

「お察しの通りです、見えぬ犯人の遺留品でもと来たんだが」

「非番を利用し本官もそのつもりで来ましたが、が、あまりにも空き缶やペットボトルが多いんで集め始めたら袋二つ満杯になった、そろそろ退陣せねばと想っていたら一平さんが橋上に、で声かけました」

「ご苦勞様、人それぞれだがちよつと氣を付ければ街中、公共の場からゴミは無くなるんだが、そのスーパーの袋に入っているのは」

「使い捨てのライターやボールペン、ハンカチ、乾電池など小物が入っている」

「そのビワのような形をした黒い瓶は」

「ラベルは消えてしまったが香水の様な氣がする、それとこの平たく三つ重なったのはラジコンの電池の様だ、鑑識に同期の村谷がいる、酒を交わす仲だ信頼もある、何か手がかりになればとそいつに調べてもらおうと想っている、異存はないよな」

「現役時代、小生は皆に言い続けた、行き詰まったら現場の戻れ、コンマ以下でも可能性ありと見て捜査せねばならぬ、稲垣さんお願いします」

「結果はどうあれ、やらねばならんよ、チームいっぶくのメンバーやもん、捜査半ばで監察官が本庁に持って行き事故

死として決定した、そんであの筋の様な波線の様な(り)と(乙)も気になる、一平さんを味方に出来て一層やる気が出たよ」

「稲垣さん、現役の警察官である事忘れんと事にあたって下さい」

「私から言うのもなんだが自己管理はしっかりできています」

「正直外堀は埋まり始めたがどーやって攻めればいーか足踏み状態、なんせ警察手帖はないし相手が相手だけに」と一平は稲垣さんに言う。

「私も微力ながらお手伝いさせて頂きます、何なりと仰せ使わせ下さい」

有難うと言って缶コーヒーを渡した、二人は日向にぶつさりこんで事故死を振り返りながらも世間話をする。

別れた一平は多磨霊園に続く散策路を下り始めた、野鳥達の水飲み場には数人の鳥撮りさんがいた、顔馴染の人は上がった様で見受けられない、軽く会釈し早馬の停めている駐車場へ向かった。

いっぶくに戻り窓際で写真の整理、コーヒーでもどうぞとまりがレアチーズと一緒に持って来た。

「収穫合ったの」

「稲垣巡査長が事故死現場でゴミ集めをしとった、ガキさんも事故死に疑惑を持っている、手掛かりらしきものないか空き缶、ペットボトルを集めていた」

「ゴミ集めとは貴重な人ですね、やろうと想っても中々出来るものではない」

「手掛かり探しもあるが小生もそー想っておる」

ルパン三世が喚いたマキだ。

「一平、一人で捜査しないでね自分も行くからね」

「おーい、保育時間じゃないのか園児は大丈夫か」

「だいじょうぶ、トイレに行つて来ますと教頭の麻耶さんをお願いしたの、そのついでに電話入れたの、忙しかった」

「そーうじゃーないが小生にやーついでは電話せんのかよ」

「ついでも悪かったね」

「そー言う事じゃーない、で何か伝えたい事があったんでは」

「今朝、のりを送って行ったら言い出したの、翔平の荷物が五つばかり手つかずでDBに入っている、衣服は別として捜査資料用に押収された残りがあるつて。自分は見たんだけどそれらし物、書類は分からない。ひよっとしたら手掛かりになるような物が、眼の違ったところで一平に見てほしいんだつた、行ってみようよきつと何かあるよ」

「行ってみる、日時を打ち合わせしといてくれ」

「よっしゃー」

マキの威勢の良い返事、園児に呼ばれたらこんなしかたで返事をしとるのか、悪い事ではないがハイとかの返事はマキの中には死語か。

「次の水曜日十三時三十分羽田着の便で着く、木曜日からそのまま三日間オフに入る、とE便が入つた、井の頭には五時には楽に着く五時半、井の頭ではどうだと言ってきた」

一平はスマホの予定表に水曜午後五時半にのりと記した。

井の頭、のりのワンルームマンションにはマキを加え三人が座卓を囲んでいた。

「一平さん、色々翔平に携わって頂き有難うございます。先にも言ったようにあそこから偶然もありうるがチャリで転落は考えられない、事故後空き巣が現金にも目もくれずPCだけ盗んでいった、両件は所轄捜査半ばで本庁扱いなり運転ミスによる事故死で、PCは単なる空き巣で終わった。監察官直々で持って行つた、これでは翔平が泛ばれない、一平さんマキお願い、真相暴いて」

「偽名使つたり偽住所で小荷物授受をした監察官とピース王国大使館、一等書記官補佐の白家秀忠は繋がっている、この二人に翔平さんがいかにあるかだ。マキも一生懸命対応してる」

「自分はある時は白金台若き貴婦人として、またある時は宅急便の配達員として一平等に協力したよ」

「マキありがとう、今宵は自分が名はないが夕飯作る、食べてつて」

「これらのDBだな調べ始めよう」

一平とマキはバインダーや封書、無造作に括ったA4紙などを捲り始めた。アルバムを見ていたマキが要所要所に付箋を挟んでいる、バインダーに綴りも一平が同様に……。

台所では炒め物をしているのであろう、適度なジャージャー音が、トントンとまな板を叩く音に混じる。

「出来たー食べようよ、酢豚とホタテひもとエノキに菜を入れる、兄が作った奈良井宿産の味噌を溶ぎました」

「一平、匂いに負けそう食べようよ」

「気合いが入っておらんと言いたい、が小生も腹減った御馳になろう」

「ご飯のお代わりあるよ遠慮なく言つて」

「ありがとう、そーするよ、アルバムには二人が出会った当初からの写真も多い、皆で撮ったのも多い、又子供が入っているものもあるが」

「中々休みが合わなかつたが合う毎に出掛けていました、翔平を自分の故郷奈良井宿にも連れて行ってくれた、その写真がこの辺に、一キロ続く宿場町を通る中山道、昔ながらの家並みが続きます、これは総ヒノキ造りの奈良井大橋、この付近には大型バスが停まれる駐車場も出来ました」

「この写真はどこで撮った」

「大使館のあるビルの屋上です、毎年いや毎年と言っても二回目だけど、館員の歓送迎会と称して家族慰安をしています。その時のです」

のりは次を捲り言い始める。

「翔平と撮ったその後ろに映っているのが大使ご夫妻、この写真は一等書記官と補佐官と今年入った職員八人です、

アルバムは逃げないよー、向こうのカウンターに置いて食べようよ」

「相や申し訳ない、頂くとしよう」

一平とマキはアルバムやバインダーを片付けテーブルに着いた、のりが手際よく料理を器に盛り並べる。

食事しながら、のりやマキに気遣いながらも事故死ではない殺人で、そのパーセントの可能性を求めてだろう、のりに質問す。

「あの綴りに来年の秋に国王ご夫妻と王女が来日予定とあったが」

「はい、今年の秋になります、ピース王国の国王自ら観光客誘致の為、王妃と王女を伴い来日を予定しています。王女も誘致活動を行います、傍ら八丈島しか生存しないユウゼンチョウウオを見たいと言っているそうです」

「彼女は潜りは達者なのか」

「ピースはご存知の通り海洋国です、マリンスポーツは盛んです、フィッシングは固よりダイビングも盛んで王女自らインストラクターをしています。翔平はダイビングはお手のもの、西伊豆を始め島嶼へもオフの度に潜りに行っていました」

「で、のりは潜りはどーだね」

「チョー苦手と言うか潜りはしない、留守番です。結婚前八丈島へ連れて行ってくれました、八丈のダイビングはポイントまでモーターボートで沖に行き潜るの、翔平の奴ったらいつも海中散歩を楽しんで来まーすと言ってボートの縁から後ろむきにドボンです。上がって来た時にボートがいないと命に関わる、船長さんに協力し潜水位置に確り停めていました。お嬢さん、三十分は上がってこないゆっくりして下さい、と船長さんは言ってくれた。雑談を交わし紺碧な海と空を八丈の島を眺めていた、その下で翔平は海水魚さん達とどんな出会いをし戯れてるのか、そんな想いに更けていた時突如襲われてしまった」

「穏やかじゃないね、船長さんに襲われたのかい」

「一平さんったらやだー、そうじゃないのチョー船酔いよ、船には乗ったのは大型観光船やフェリーだけ、幾ら大型ボ

ートたつて海じゃー木の葉同然、揺れに揺れるは心底から苦いものが上がつて来る、立つて居られずデッキにへ足り込んでしまった、船長さんはデッキは危険だからキャビンで横になつたいなさいと。所謂マグロになった、どの位経つただろうか頬に冷たい物を感じた、翔平の手が両頬をポンポンと、港に着いたよ陸に上がろう」

「また行きたいかい、なれば大丈夫なのでは」

「八丈島は良いがダイビングのお供はごめんと、歴史に満更でない自分はレンタカーで名所旧跡巡りしていました、南原千疊敷で故郷の岡山に向かい愚痴一つ零さず微動させず座り続ける島流し第一号、宇喜多秀家ご夫妻にお会いした、そんなこんなで一平さんの言葉を借りれば八丈では自分流に謳歌していました」

「この写真八丈島で撮ったの」

と言ってアルバムに付箋を挟んだページをのりに示した。

「そうです八丈で撮ったものです、翔平はダイビング仲間三人で大賀郷にアパートを借りています、キッチンにバストイレは共用ですが三部屋ありプライベートは保てます。自分達の後ろ右が橘さんで左が木下さん、昨年四月に結婚祝いをしてくれました、二人は潜りは然る者包丁捌きはプロ級、魚介類を見事に盛り付けます、それに唐辛子で作った島とう醤油が盛り付け脇に。八丈では以前は高価なワサビが手に入らなかった、島唐辛子を代用したそうです、それが今日に伝わり刺身には島とう醤油が一般的食法です、八丈に帳降りる頃お二人さん、できたよこちらにどうぞと木下さんの部屋に呼ばれた。真ん中に大きなちゃぶ台があり魚介類が所狭しと並ぶ、大賀郷産の島流しと青ヶ島の青耐が出番を待っていた」

マキはそーっと一平の表情を覗き込んだ、想った通り自分もそのちゃぶ台の席に呼んでくれと言わんばかりだ。

「で、乾杯となりました、ちゃぶ台には上座下座はない、お二人、氣に入った所へ座つてと橘さんが言いグラスに氷を入れ島流しを注いだ。音頭は木下さんがとった。始めて口にする島焼酎、これいけるなーと翔平の耳元で囁いたら飲み過ぎんなよと一喝されてしまう、島とう醤油が刺身に程よく絡まる、自分のグラスを見た木下さんが今度は青耐を注い

だ、翔平を横目にしながらVサイン、何時しか盛り付けも少なくなった、のりさんこれをどうぞと二人は寿司を持って来た、島名物の島寿司です、漬けこみは浅いかもしれんが見よう見真似で作りました、八丈に凝ってワサビの代わりに練りがらしを使いました。空かさず翔平が一貫口にした、グーマーク。そこまでは覚えているが窓から差し込む日差しで眼が覚めた。

はつとし胸を押さえた、確り夜具を着用してた、翔平が着替えさせてくれたか隣を見た、布団は畳んである朝散に出掛けた後だった」

「小生も朝散は日課の一つやが翔平さんもそーだったのか、ならばのりも朝散は」

「朝散はしないが朝シャンは時たま、シャワー浴びたかった、だが翔平はいないしうろついていた、おはよーと橘さんが声を掛けて下さいました。うろつきを察したかシャワー浴びたらと、はい有難うございます、浴び終わり部屋でドライヤー掛けていたら翔平が戻った、キッチンで朝飯できたぞと木下さんが言いました」

「トビウオの塩焼きに昨日切り落とした、頭やアラに野菜が入った味噌汁が大鍋に、あそこの釜にはご飯が器と箸はここにあります後はご自由に」

「のりちゃん、昨夜の魚介尽くしと言い今朝の海洋食、ここではこれが並みや堪らんだろう、もう一泊してたら」

「ありがとうございます、でも明日は九州便に乗務しなければならぬ翔平の休みは今日までです、午後便で羽田に戻ります」

「じゃーのりさん、時々我らを想い出しておくれそして落ち着いたら又来て、のりさんは仲間だ結婚のお祝いだ」

と言って大小の包みを前に、

「年に似合わずはにかみながら二人は差し出した。包みの中は黄八丈のバックとネクタイでした、ありがとうございます、想わず二人に両手でハイタッチ」

「昨日は海ん中だったが今日は山のビューポイントへ案内しよう、かたづけは我らがします、時間までごゆっくり、時間

が来た行こう」

「それは八丈富士の中腹に在りました。ふれあい牧場にはジャージ牛が放牧されている。駐車場から牧場の中のまっすぐ続く遊歩道を行く、行く着いた所が展望台になっていた。のりさんここから飛行機の離発着が見えますよと言う、橘さんが頻りと時計を気にしている。前方の山が三原山、中央は飛行場で左手が底土港のある三根地区、右手は八重根港でその手前辺りが我らのアパートのある大賀郷地区等々、時計を散々見ていた木下さんが、あつ来た」と声をあげた。

「指さす底土港上空を見た、微かに光るものが徐々に大きくなり影がおぼろげに、飛行機だ八丈島着八時二十五分ANA1891便です。車輪辺りからポット煙りが上がり、自分はずちの飛行機が着陸すると大燥ぎしてしまいました、1891便は滑走路上でUターン、そして駐機場へ、アイスクリーム買って来ると橘さんが売店へ、ジャージ牛で作ったアイスの美味かった事。

今度は離陸だ1894便はスポットを離れ始めた滑走路の外れでUターンし機首を北に向ける、4人はその時を待った、ソロリ動き始めエンジン音が響き渡り滑空が始まる、自分等のやや左でテイクオフ想わずキャッホー、シーユーハネダと叫んでしまった、北に向かいぐんぐん高度を上げて行き点になり消えた。

「翔平のその時の燥ぎよーったら口では表せられない。自分も興奮気味、数え切れないほど離着陸してんのに外から一遍たりとて見た事なかった、少し遠いけど離着陸の一部始終目の当りしたんだもん、自分も燥いじゃったよ」

「はーんそれもそうだな、見て燥ぎ喜んでくれてありがとう連れて来たかいがあつたよ、昼にはちよいと早いが行くとしよう」

大賀郷にある一休庵へ橘さんは車を向けた。昼時は常に満席だが早いせいか空席が目立つ、座卓を囲んで皆胡坐かいた。

「冷やしたぬき明日葉うどんかそばがグーだ、どうする」

と橘さんが聞いた。

「そのソバでお願いします」

と自分は言った、翔平が続いた橘さんも木下さんもそれで行こうと続く。アシタバを練り込んだ緑色した麺、揚げ玉が入りアシタバとエビの天ぷらをのせ少し冷やしたツユをかけたものだった、美味さ余韻に浸り駄弁っていた。

「僕らは後二泊します、飛行場まで送りましょうと橘さんが言って下さった」

「翔平はお言葉に甘えますとコックリ、再開をお約束しハイタッチで機上の人となりました」
のりは後片付けも忘れ喋り捲った。

その後二人とは再開したのとマキが聞いた。

「再開も何もないよ、翌月には翔平はキスゲ橋で」

「あつ、のり御免タブーな質問しちゃった」

「いいのよ気にしないで」

「十二月、年末年始の休みを利用して八丈に潜りに来ています、ひょっこり翔平が来るような気がしましたが、が現れないのは言うまでもありません。でも翔平がいつ来ても良い様に我らの部屋同様に布団を干し部屋を掃除しキープしてあります」

「と二人から手紙が年明けに届きました、近況を報告がてら有難うございますと返しました」

一平は仲のいいダイバートリオだったんだねと言った。

「翔平は自慢話はしない主義でしたね、木下さんが言うには潜りはプロ級、自分等にもすすんで指導してくれた。来年の秋には八丈で王女にユウゼンチョウウオに合わせる為にダイビングのお供に抜擢されていたそうです」

そんな事一言も自分には言わなかったのにとのりが。

マキが一平をチラッと見しゃべり始める。

「一平も往々にして似通っている」

「自慢話なんぞ小生の趣味ではない」

「お二人さん、その辺で自分の話には続きがあります聞いて下さい」

あいや申し訳ない続きはと一平。

「ピース王国、国王ご夫妻、王女来日は先に言った通り今年の秋です。来日中の日程予定はチームが編成されました。一等書記官シャルムが責任者となっている、実質的には補佐官の白家秀忠が取り仕切る、翔平と同期の海老原幸子さんがチームに加わるように辞令が出た、この時ばかりは自分にも話してくれた。その日からと言うもの、書類を持ち帰ったり日付が変わる頃、帰ったりしていたが愚痴零さず生き生きとしていた。がとある日、書類に眼通すもぼつとしていた、そんな仕草が日増しに多くなり五月キスゲ橋となった」

のりの言に一平の眼が大きく輝きを増していく。

「結婚前はどーだったねその仕草は」

「自分が気が付かなかったかそんな一面があつたのかは知らず仕舞い」

「なぜゆえにその仕草が出始めたか気付かんかったか」

「心当たりはありません」

一平の奴何か掴んだなとマキは二人を見、言った。

「九時回ったよ一平の時間になったよ」

と言ひ片付け始める。

「あつもうこんな時間、しゃべり過ぎちゃったー」

「小生の興味引く話の数々ありがとう」

と言ひ一平も腕まくりし食器を洗い始めた。